琉球大学学術リポジトリ

沖縄県における高校中退者・不登校生徒の進路意識に関する総合的研究

メタデータ	言語: 出版者: 藤原幸男 公開日: 2009-07-28 キーワード (Ja): 学校評価, 高校中退, 進路意識, 沖縄文化, 中退体験, 青年期, 学校改革, 生活設計, シマ共同体, アイデンティティ, 適格主義, 深夜アルバイト, 教師の対応, 学区制, 適格者主義 キーワード (En): Okinawa historical-cultural structure, consciousness on Life course and school, adolescence, school evaluation, highschool dropout, school reform, identity, school dropout experience 作成者: 藤原, 幸男, 照本, 祥敬, 長谷川, 裕, 村上, 呂里, 三村, 和則, Fujiwara, Yukio, Terumoto, Hirotaka, Hasegawa, Yutaka, Murakami, Rori, Mimura, Kazunori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/11529

第2部　「中退」が交差する場
――― A島でのインタビュー調査より

はじめに

I　シマンチュ（島人）の「学校」観の歴史的文化的背景

II　青年たちをとりまく社会的諸条件

III　シマ共同体に生きる

IV　青年会体験

V　「中退」体験と青年期のアイデンテイテイ形成

VI　デイスカッション
「中退」への意味づけとシマ共同体における学びの可能性

おわりに

はじめに

―― A島における「中退」問題の調査研究の概要について ――

照本祥敬

わたしたちがA島での調査を実施したのは、この島に内在しているであろう地域社会の固有の論理をくぐらせることをとおして「中退」問題の背景にある社会的・文化的文脈を具体的に浮かび上がらせたいと考えたからであった。

調査の開始当初、わたしたちが明らかにしようと考えたのは、およそ以下のような内容である。

1. この島固有の社会経済的条件と「学校」「進路」「中退」との連鎖
2. この島の歴史的・文化的固有性と「学校」像、「中退」像との連鎖
3. 島の出身者たちの「中退」体験のありようや「中退」への自己規定のあり方
4. 彼らの帰島後の生活と青年期的アイデンティティ形成のありよう

これら4つの内容を基本的視点にして調査を進めていったが、いまふりかえると、3年間の調査研究期間中にこの島を訪れたのは7回に及ぶ。調査の主要な方法として、中退経験者を中心にしたインタビューを採用したが、わたしたちは、この島の人びととの〈出会い〉のなかで、その都度さまざまな〈発見〉を経験することができた。また、次章以降に登場する、Yさん、Tさん、Mさん、Hさん、Rさんらとの継続的な交流は、この島の「外」に暮らすわたしたち3人にとって「研究」の枠をこえた貴重な成果をもたらしてくれたようにも思う。それは、わたし自身についていえば、自らの「学校」および「中退」体験、青年期遍歴のありようを、MさんやHさんのそれらとかさねながら意味づけなおす機会が与えられたことであった。

いずれにしても、この島の人びととの出会いは、わたしたちにとって、研究計画の時点ではもちえなかったいくつかの〈視点〉のひろがりと深まりをもたらしてくれた。わたしたちがどのような発見をし、新たな視点を獲得・検証していったのかについては、とくにⅡ以降の内容についての検討に委ねることになるが、ここでは、調査研究の進展をある程度まで時系列に対応させながら、聞き取りの内容上の区分にそったかたちで簡単に記しておこう。

1. この島の教育委員会への聞き取り。この時に応対してくれたTさんより、島の高校進学率、中退率、中退者の生活状況などについての説明を受ける。また、この島にある唯一の中学校を訪問。「進路指導」の概要についての説明を受ける。
2. Tさんの紹介により、2～3年ほど前に高校を中退して島にもどってきていたRさん、Kさんへのインタビューをおこなう。「中退」の経緯、「中退」への自己規定のありよう、現在の生活状況や当面の見通しなどについて聞き取りをする。
3. この島で教師をしていたSさんより、Mさん、Hさんを紹介される。Mさん、Hさんからそれぞれの「高校」「中退」像について聞き取る。また、中退後の状況について（島にもどってくるまでの状況、帰島後の青年会活動へのかかわりの様子など）の聞き取りをおこなう。

4．中退者への聞き取りと並行して、この島にみられる「学校」「学力」観の歴史的文化的背景を探る作業を開始する。大正期に島で学校教育をくぐった世代からの聞き取りをおこなう。

5．この島の青年会活動が担ってきた役割について、また、Tさん、Mさん、Hさん3人それぞれの「青年会」の意味づけについて、わたしたちを交えた座談会のようなかたちでの聞き取りをおこなう。

以上が、A島での調査内容の概要である。

さて、わたしたちが採った研究方法は、すでに述べたとおり、中退経験者を主要な対象にした聞き取りである。この方法にこだわったのは、中退者の「学校」や「中退」の意味づけ、中退後の青年期遍歴のありようなどについて、その実像を彼ら自身の「声」によって検証したいと考えたからである。いや、そればかりではない。「中退」の背景やその誘因基盤にある重層的な社会文化的条件、たとえばシマ共同体の生活論理、それぞれが属する社会的階層や性差、世代差による条件の違いなどが、彼らの「声」のなかにどのように凝縮されているのかをつかみとりたかったからでもある。

このわたしたちの試みがどの程度まで達成されたのかについては、正直なところ、自信がない。この島で出会い、交流を深めることができた人びとが語ってくれたコトバをどれほどまですくいあげることができたのか、あまり自信がない。

ただ、誠実きわまりない彼らの語りにたいして、わたしたちなりに精一杯応えようとしたのが以下に続く報告の内容である。わたしたちの調査研究がどれほどの意味をもちえているのか。なによりもまず、Yさん、Tさん、Mさん、Hさん、Rさんをはじめとする島に暮らす人びとの批判に学びたいと思う。

I シマンチュ(島人)の「学校」観の歴史的文化的背景

村 上 呂 里

外からのまなざしによれば、シマ共同体として括られるかもしれないが、その内部は一様には描きえないだろう。シマンチュの「学校」観の歴史的文化的特色を描きだそうとするとき、それを陰に陽に彩る源に、首里王府時代に遡る島内部の階層分化があることがうかがわれる。この島には士族はいない。首里王府は、番所(バンジョー)をおき、農民代表の地頭代(ジトウデー)を通して島を統治し、地頭代を冠とする地方役人層と一般農民層とはしだいに截然と分化していった。この二階層に応じて、有筆(文子(テクイゴ)以上)無筆の区別、敬語の相違をはじめとして、教育のあり様も文化のあり様も画然とした異なりがあった。

沖縄の人々の「学校」観をめぐっては、沖縄内部の階層に注目して前近代から近代への連続性を重視する立場(浅野・佐久川、1976)と学校=「大和化の拠点」として忌避する意識を重視する立場(近藤、1993)とがある。注① この小論では、この論点を心にとめながら、ある島の場合として、「学校」観の歴史的文化的背景を描きだすことを試みたい。なお、「学校」観としたが、教育のあり様、学力観、学歴への構え等、近代国民国家、近代産業社会の下での「学校」をめぐるさまざまな意識を含み込んで用いている。

1 「一人前」観

まず、近代以前からのシマ共同体に根ざした教育のあり様を、「一人前」観を手がかりに見ていくことにしたい。注②

男女とも生年祝いが干支に合わせて十二年毎に生年祝いが行われる。女子はとくに、十三才祝いを盛大に行う。男子はこの他に、十五歳になると「ハタッシャユイ」祝いという元服のお祝いがあったという。幼年の髪型から結髪し、片髻という髪型にした。この祝いは朋輩や客人を招いて盛大に行われ、この祝いで男子は「一人前」と見なされ、税金や夫役も課せられたという。元服すると、「キーフーゾー」(木富蔵、木製の煙草入れ)を強制的に持たされ、煙草も吸い、ユイ作業にも出た。ユイマール(相互労働扶助)への参加が、「一人前」の主要件であった。「ハタッシャユイ」祝いは、明治二十年代後半頃までの風習であったという。

女子は、十七、八才になると入れ墨を施した。これが男子の元服に相当するもので、結婚適齢期の意思表示となった。入れ墨については、やはり明治二十年後半頃までの風習であったという。

男子は労働力として、女子は結婚出産の能力をもって、「一人前」として共同体への参入を認められた事情は他と変わらない。「一人前」であることを求める共同体のまなざしは、男性に対してより厳しく注がれ、それは今も変わらないという。

「一人前」観の変遷については、詳らかに述べるだけの資料を持ち合わせない。

筆者の複数の方への聞き取りによれば、今日の「一人前」観の基準は、「仕事をがんばって、きちんとすること」「所帯をもつこと」

であるという。これらを求める共同体のまなざしは厳しいという。この基準からも「一人前」が意識されるのは、主として男性に対してであることがうかがえる。「一人前」をめぐるジェンダーの差異は、今日にいたるまで強く意識づけられているといえるだろう。(「一人前」という概念そのものにジェンダーの問題が孕まれているのかもしれない。Ⅵディスカッションを参照されたい。) その他、地域の行事への参加、その行事で踊る踊りの伝承等が、「一人前」の条件となるという。いったん島を離れていても、これらを通して共同体に受け入れられるのである。

「一人前」の主要件であったユイマールの風習は、近年、急速に消えつつあるというが、農業生産の場などで未だ見られる(Ⅲ２参照)。また、シマンチュの会話に「ユイマール」ということばはしばしば聞かれ、心性としては根強く息づいているといえるだろう。たとえば、入学時には出費が嵩むために、相互にお祝い金を出しあうのも、一種の「ユイマール」として表現される。

今日、島でおこなわれている成人までの節目のお祝いを順にあげるとつぎのようになる。マンサン祝い(生後７日目)、タンカ祝い(一歳)、小学校の入学祝い、十三祝い(成年祝い)、高校入学祝い、そうして成人式のお祝いである。これらのお祝いは家族単位に行われるのではなく、親戚や父母の同僚、同級生など地域ぐるみでおこなわれる。シマ共同体として、子どもの成長を願い、喜び、「一人前」にいたる道筋を見守るのである。子どもをシマ共同体として育もうとする習俗や心性は、変わりつつあるも息づいているといえるだろう。また、このお祝いをみると、近代以前からの共同体の民俗にもとづく節目と、近代以降の学校にもとづく節目とが共存していることが興味深い。

このこととかかわって、一つの仮説として、つぎのことが考えられる。かつての元服年齢にあたる十五歳は、今日、高校入学の歳にあたる。島には高校がないために、高校入学はすなわち島を出て暮らすことを意味する。それゆえ地域ぐるみでお祝いをして、「がんばれよ」と送り出す。その旅立ちは、(人生の)旅としての意味あいをもち、その旅立ちのお祝いには、旅をしてひとまわり大きな人間となって再び島に戻り、共同体を担っていってほしいという願いがこめられているように感じられる。そこには都市部において見られる、互いに競争関係のもとに各家族ごとに独立(孤立)して祝う高校入学の風景とは、ずいぶん異なる風景＝意味が広がっているのではないだろうか。島において、高校入学は、単に上級学校進学としての意味あいのみならず、島を出る＝旅として、すなわち「一人前」へのイニシエイション(通過儀礼)としての意味あいを帯びているのではないだろうか。

「高校」をめぐる、地域共同体における「一人前」へのイニシエイション(通過儀礼)としての意味あいと、個人ないしは家族の要求としての学歴や資格取得としての意味あい等との交じり合い・葛藤は、今日の島における「一人前」観や「学校」観の変遷をとらえる際の一つのポイントになるといえるだろう。

その他、シマ共同体の「一人前」観をめぐって注目されることとしては、エイサーの際に青年団の一員である高校生が酒を飲むことへの姿勢があげられる。この姿勢における葛藤は、共同体の民俗に根ざす「一人前」年齢に拠ろうとするものと近代以降の学校年齢に拠ろうとするものとの葛藤としてもとらえられよう。

今日の島には、近代以前から連綿とシマンチュのからだに刻みこまれてきた共同体の教育の“時間”・“意味”と近代学校が新たに区切り、刻みこもうとした「教育」の“時間”・“意味”のもたらしたせめぎあい・葛藤が、

さまざまなかたちとなって現れているように思われる。

2 文　化

一般農民層の暮らしの文化を彩ってきたものとして、毛遊び（モーアシビ）があげられるだろう。モーアシビは、王府の命を受けた番所によってたびたび取り締まられたが、若者の抵抗は強く、「琉球処分」（1879年）以降も長く行われた。「昼の取仕事　気張て働ちん　夜のひま遊び　御止めみせみ/夜んゆるさぬ　番所の仰せ事や　あんまでやっさあ　地頭代の主」などのモーアシビ唄が、その間の事情を物語っている。モーアシビは、「早く弾きみしょり　三線や男　歌や美童も　連れてしゃべら」で、始まったという。注③

筆者の聞き取りの際、マガさん（1911（明治42）年生まれ）とタケさん（1914（大正3）年生まれ）は、つぎのように語っている。注④

> マガ　モーアシビーは、カチャーシーしてよ、踊ったよ。昔はね、三線（サンシン）なかったからよ、畑からもどるときに、鍬の、鎌であれして、またクバ笠かぶって、クバ笠また鎌で打ってね、弾きよったって。「キープドゥ」といってね、木で作ったよ、煙草入れ、作って、打ってね、三線がないからよ、口三線でよ、トゥントゥンテン、トゥントゥントゥ、ってして。キシェル（煙管）打ってよ、行き帰り、畑の帰りによ、三線の、男がトロントロンしたら、女は唄してよ。戦前、働き盛りにね。
>
> タケ　お祝いも、昔は朝まで三線と唄したよ。帰さなかったよ。

「キープドゥ」や鎌を打ち、口三線を伴う唄は、この島独特のものであったという。このあと、マガさんとタケさんは「オバーが唄うから聞いてね」と、つぎからつぎへと「キープドゥ」で唄われた唄を唄ってくださった。

勤勉な働きぶりで知られる島の人々だが、労働の間にまに、暮らしを楽しんでいた声の文化のすがたが、マガさん、タケさんの姿の向こうにつらなって想像される。こうした暮らしが、戦前くらいまでつづいたらしい。注⑤

一方、地方役人層の子どもたちには、このような歌や踊りの遊びは許されなかった。

地方役人層の子女であるＮさん（1916（大正5）年生まれ）は、私達の聞き取りの際に、つぎのように述べている。注⑥

> （踊りについて）上の学校に行く人は、それには参加しなかったんですよ、（中略）これは、一般の、下の人達の踊りだからやるなっていって。
>
> 子守歌とかね、モーアシビね、それは歌はいっぱいありますが、これも一般の、下々の人達がやるもんであって、そんなのはしないように、いわれていたんですけどね。

歌や踊りの遊びの禁止の一方、文字文化を学ぶことは、地方役人層の子息にしか許されなかった。文字文化は統治機構とのみ結びつき、その他の発展はなされなかった。また地方役人の子どもといえども、女性は文字文化を身にもつことは許されなかった。その間の事情は、1885（明治18）年、地方役人層の家に生まれ、初代島長（村長）に嫁ぎ、教員の妻であった「伊是名ばあさまの昔がたり」注⑦に語られている。その他、敬語や親族呼称等も、地方役人層と一般農民層の間では、画然とした差異があった。

もう一つ、一般農民層の文化を彩り、「学校」や学力観にかかわるものとして、ジンブン（生きる知恵）というシマグチ（島口）をあげることができるだろう。ジンブンとは、語源を

遡れば「思うところ、考え。意見。」という意の「存分」であるという(『沖縄語辞典』)。学校的学力に対置され、生活の場面に根ざして働かす知恵の意である。今も島では、このシマグチはよく用いられ、学歴のある人よりもジンブンムチャー(生きる知恵をもつ人)が重んじられるという。たとえば山羊(ヒージャー)をさばく際にも、いくら大学で畜産を学んでいたとしても、その場でジンブンを働かす人の方が重んじられるのである。「ジンブンノ　アレー　サビシロー　カモン(知恵があったら、何もだしのないつゆは飲まない。何とか知恵を出しておいしくするものだ)」ということばを、昔のおじいちゃん、おばあちゃんはよく言ったという。貧しい生活を生き抜く知恵を重んじた歴史が感じられる。シマ共同体を生きるうえで必要な学力として、ジンブン学力観は、今も根強く生きているといえるだろう。

島の文化をめぐって、あえて単純化するならば、一般農民層と地方役人層とのあいだに、声(からだ)の文化:文字文化、ジンブン:学問という拮抗関係が見られるといえるだろう。

3 学　校

番所役人(地方役人)を養成する学校は、この島では会所(クエージュ)と呼ばれた。学ぶのは十五才以上の若者で、入所できるのは門閥の子息に限られていた。師匠は、首里那覇の士族を招いた。琉球全体がそうであったように、学校とは、すなわち官吏養成機関であった。

この島では沖縄のなかでも早く、1880(明治13)年6月に、小学校が設置された(以下、A小学校)。東会所焼失に伴い、「琉球処分」直後に派遣された当時の番所在勤県属が、県に小学校建設を申し出たという。これに伴い東会所は閉鎖されたが、西会所は明治20年の後半まで残ったという。A小学校設立当時は、番所入りを目的とした首里の奉公帰りの壮年の者もおり、就職の目途のない学校として中退したという。意識としては会所と連続していたことがうかがえる。注⑧ 1898(明治31)年には、師範学校卒の息子の意を受けた地頭代(ジトウデー)により、義務教育制の導入にむけて、学校移転がすすめられた。このときの地均しの作業の賦役がたいへんで「倒れ学校」と呼ばれたという。役人層と一般農民層との「学校」への意識の差がほの見えるエピソードである。この新しい学校の中庭には、御嶽が残されたという。明治20年代の平均就学率は、18%であった。注⑨

1880年のA小学校設立に土地を提供するなど尽力したのが、東江実助であった(Nさんの曾祖父にあたる)。実助は、「江戸上り」帰りで汽車の開通式等を見、近代的な学問の必要性を感じたという。実助は後に最後の地頭代となり(1895(明治28)年)、この一門は、以降もこの島の行政や学校教育に重要な位置を占めることとなった。

この島では、首里王府時代と同様に小学校設置以降も、行政機関と学校とは密接に連関しあっていた。地頭代→島長→村長の一門が教員であったり、教員が校長から村長となったりという関係にあったのである。たとえば、島出身の初めてのA小学校校長(1926(大正15)年より校長)は、地頭代東江実助の次男の息子にあたる。彼は、のちに村長となった(1938(昭和13)年)。そうして、この方の娘が、1947(昭和22)年より長く島の小学校の教員をされたNさんである。首里王府時代の地方役人層と教員層、さらに「琉球処分」以降の官吏との連続性が典型的に見られる一門であるといえるだろう。この連続性にもとづき、教員の地位は、島において非常に高かった。以下、Nさんの回想である。

「チョーインドゥ　ヤンシェリ（教員ですか）」ていって、昔のチョーインっていったら、もう神様みたいに。(略)

このー、今も笑い話に出るんですがね、学校の先生はねー、トイレにも行かれるかねーというくらい、みんなね(笑い)、おしっこも出されはするかねーって、神様みたいに、もうあがめていたから。

教員層の家庭と一般農民層の家庭とは、服装から、家族の呼び方、名前もちがった。首里王府時代の文化の相違に加えて、その違いに、今度はヤマト風という要素が加わることになった。

私達は、小さいときから教育界にいたから、ずーっと後ろ結びでね。そしてね、みんなと一緒にしたくて、前に。そうしたらね、父におこられて、後ろにしなさいといって、後ろにさせられて。

後ろ結びは、ヤマト風であり、Nさんは、教員の子どもは上級学校に進むのであるから、ヤマト風にすべきだと思っていたという。

もう学校出たら、みんなヤマト風でしょ。学校の学問、教育もみんな、だからそうすべきだといって。(中略)

学校で教科書に教えられるっていっても、みんなあれ（ヤマト風）でしょ。だから、この方がいいって、私達は、将来、上の学校にも進むから、私達は。

また、農民の家庭はおとうさんのことをチャッチャー、おかあさんのことをアンマーと呼んでいたが、Nさんの家では、ヤマト風におとうさん、おかあさんと呼んでいた。（ただし、祖父母に対しては、各々パッパ、ウプシュと一般農民層と同様の呼び方で呼んだという。）また、童名（この島では「シマナー」といったという）はあったが、ヤマトナー（大和名）で「ちゃん」づけで呼ばれたという。

Nさんの父は、台湾（より「進んだ」日本の教育が行われていたという）での教員体験より、たいへん「本土びいき」であったという。姓も、この父の代に、ヤマト風に変えた。さらし木綿からパンツへの指導をはじめ、島では近代化への啓蒙的指導者であった。彼は、戦争直前、その当時抑圧の対象であった島の文化の伝承にも秘かに熱心で、そのあり様は、ヤマト指向で括ることはできない。

しかし総じていうならば、この一門のあり様には、その折々の支配（権力）者の文化に親和的な地方役人としての心性と、島の啓蒙的指導者としての近代化指向（それはとりもなおさず「本土びいき」と同義だった）の双方が入り混じって見られるといえるだろう。そうして、それは沖縄の教員層のあり様の典型ととらえることもできるだろう。

上級学校進学は、こうした〔地方役人→教員〕層の一門の子どもたちにほぼ限られた。（一般農民層から教員になった層も、少数ある。）そうして、彼らは県視学はじめ県内外の要職に就いていった。

この島では、前近代の階層の二極分化のあり様が、近代国民国家のもとでの「学校」への身構えに集約的に持ち越されたといえるだろう。すなわち「学校」に親和的な層とそうではない層とにである。そうして、それは今日のシマンチュの「学校」観に、さらにいうなら「中退」へのまなざし・意味づけにもさまざまに影響を及ぼしていると考えられる。

おわりに

島では、階層間葛藤が起こりにくく、一般農民層と地方役人層の二極分化は、近代になっても一般農民層と教員層の二極分化とし

て持ち越された。今一度単純化をおそれずまとめるならば、この一般農民層と〔地方役人→教員〕層の文化は、声（からだ）の文化：文字文化、ジンブン：学問、シマグチ：標準語、シマ共同体に根ざした文化：ヤマト文化指向といった拮抗関係をなしていたと考えられる。後者は、「学校」に親和的な文化といえる。この二極分化にもとづく文化の拮抗関係が、かえって前者のシマ共同体に根ざした文化を、今日に至るまで息づかせる方向で働いた、という仮説が考えられるのではないだろうか。

今日の島の産業の状況としては、高学歴が求められることは少なく、学歴がそれほど重んじられるわけではないといえるだろう。地方役人層の子ども達の多くは、島を出、ヤマトや沖縄本島など島の外で要職に就いていった。このようななかで今日のシマンチュの「学校」への要求は、どのようなものとなっているのか、子ども達や青年にどのような「学力」を身につけることを願っているのか…。そこに果たしてヤマトンチュが幻想するような「本土の教育的システムを近代の教育幻想もろとも相対化できるんじゃないかというような希望」「そうした隠された工ートスみたいなもの」注⑩を見出すことが可能なのか、あるいはそもそもそうした希望は、シマンチュの希望となりうるのか…。問いは尽きないが、さらにシマンチュの声を聞いていくことを課題として、おわりたい。

（注）

①浅野誠・佐久川紀成「沖縄における置県直後の小学校設立普及に関する研究　―地方役人層の動向を中心に―」『琉球大学教育学部紀要』第20集第1部、1976年。近藤健一郎「学校が『大和屋』と呼ばれた頃　―琉球処分直後の沖縄における学校―」『北海道大学教育学部紀要』第61号、1993年。

②以下、主に『A村史』上（A村史編集委員会編、1980年、A村役場発行）の「第五篇　民俗」の「第一章　人生儀礼」、「第三章　風習・伝承物語　一、土俗」を参照させていただいた。

③同前『A村史』上、「第三章　風習・伝承物語　一、土俗」、「第四章　民謡等」に拠る。

④1994年3月19日、A村にあるマガさん宅で、前沢朋美と村上がお話をうかがった。

⑤筆者の複数の方への聞き取りによる。

⑥1996年8月15日、A村にあるNさん宅で、共同研究者長谷川裕、比嘉啓信、村上の3人でお話をうかがった。以下、Nさんの回想は、すべてこのインタビューのときのものである。

⑦生塩睦子『A島のはなしことば』A村教育委員会、1994年、147−149頁。

⑧『A小学校創立七十五周年記念誌』、1956年。

⑨以上『A村史』下、58頁。

⑩佐々木賢、松田博公『果てしない教育？』北斗出版、1987年。

Ⅱ　青年たちをとりまく社会的諸条件

村　上　呂　里

ここでは、シマ共同体に生きる青年像について考察するにあたり、島の青年たちをとりまく社会的諸条件について、ごくごくかんたんにふれておきたい。

1　島の産業について

島の基幹産業は、農業であり、農業従事者は就業者総数の44.9％（1995年度国勢調査による。以下数字は同じ）を占める。農業振興を主軸にした村づくりの展開は、高く評価され、県内外における先進的な農業立村として位置づけられているという。農業就業比率は全体としては低下傾向にあるというが、若年層の就業人口の増加は、全国的に見ても特記される特徴であるという。(表①)

農業生産の内訳としては、葉たばこ、花卉、畜産、野菜類、さとうきびなどがあげられる。葉タバコ、花卉、畜産での生産額の著しい増加が目立ち、今後も期待されるという。「県全体では衰退気味の営農環境の中にあって、極めて期待される地域」として評価され、青年たちが意欲と展望をもって農業に従事することができる地域といえるだろう。

第一次産業としては、その他に漁業従事者がいる（3.3％)。モズクや貝類の養殖、タマン・マダイの養殖や飛び魚の加工等が中心であるという。

建設業、製造業などの第二次産業従事者の比率は13.8％であり、製造業においては、食料品製造業の占める割合が高いという。第三次産業従事者の比率は38.6％で、飲食料品小売業者が中心であるという。

失業率は1.9％であり、県平均10.3％の約$\frac{1}{5}$と、極めて低い。

総じてこの島には、青年たちが島に帰ってくることのできる就労条件があるといえるだろう。

（この項は、『A村土地分類調査（細部調査）報告書』1997年３月に拠る。表①も。）

2　人　　口

この島の人口は1985年まで減少していたが、農業の見直し、農業形態の変化等により定着化が見られ、1985年以降はほぼ横ばい状態にあるという。

年齢階層別人口について、1975年度、1980年度、1985年度、1990年度、1995年度の人口ピラミッドをあげる。(表②)

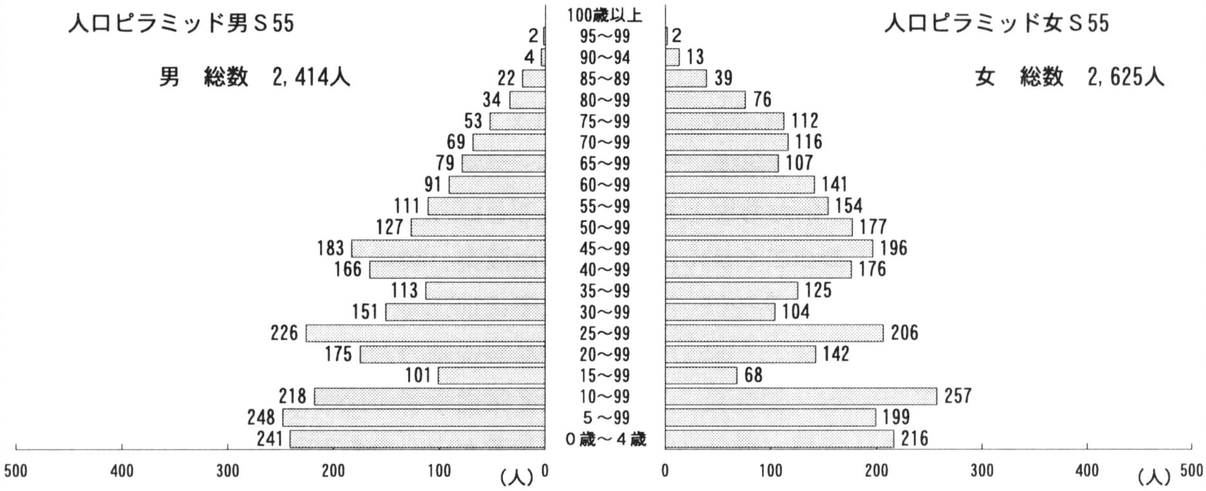
15歳－19歳の層がいずれの年度も低いのは、高校入学や就職に伴う一時的な島外への

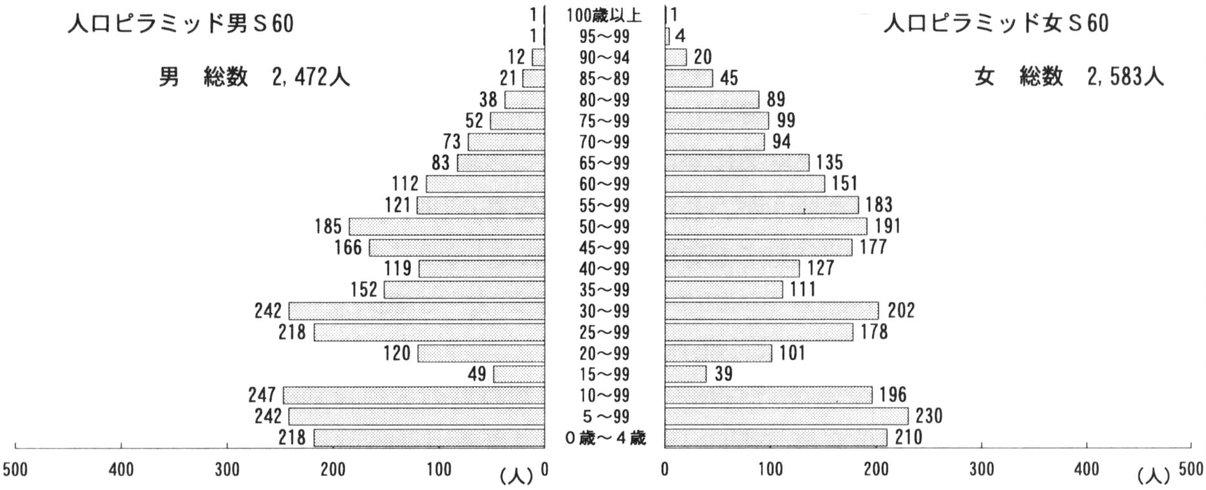
年齢別農業就業人口　　　　単位：人

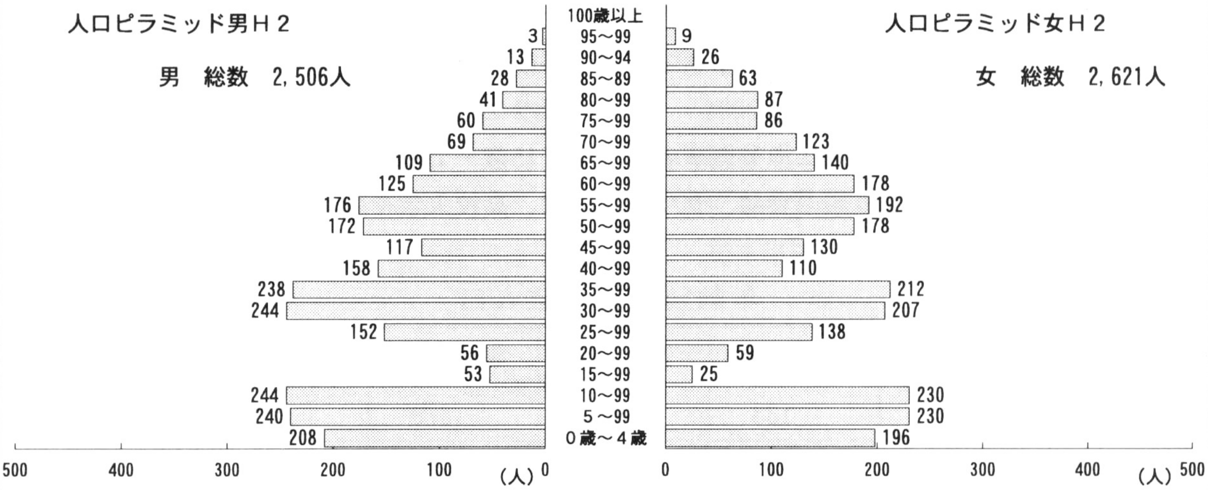
区　分	計	16～29歳	30～49	50～59	60～64	65歳以上
1985年	1,389	133	412	379	171	294
1990年	1,304	75	359	427	156	287
1995年	1,754	143	539	379	257	436

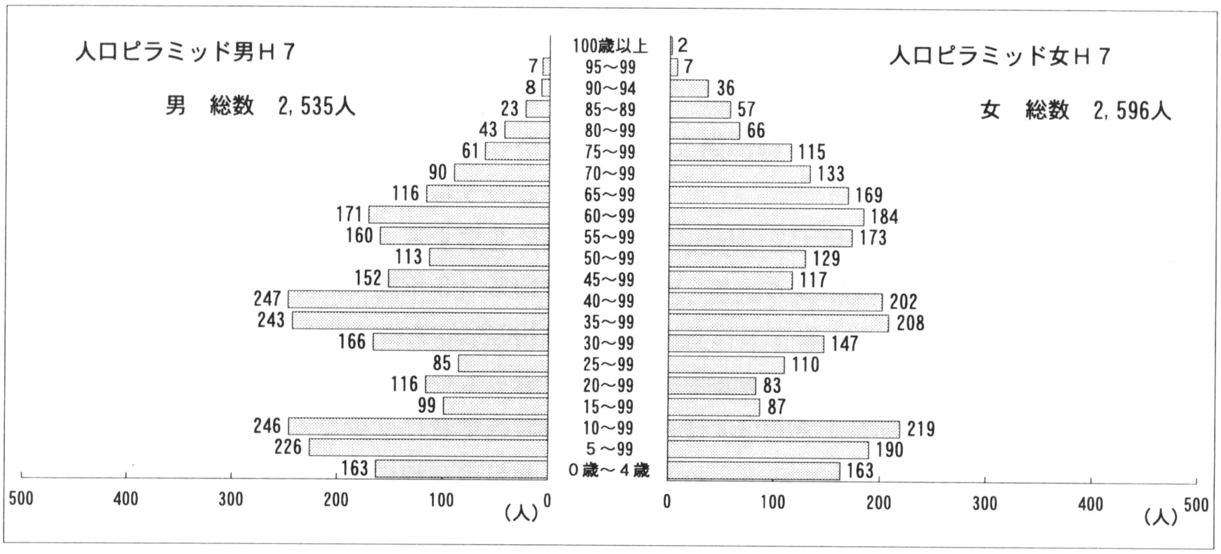
表①

表②・1


人口ピラミッド男Ｓ55
男　総数　2,414人
人口ピラミッド女Ｓ55
女　総数　2,625人
100歳以上
2 95～99 2
4 90～94 13
22 85～89 39
34 80～99 76
53 75～99 112
69 70～99 116
79 65～99 107
91 60～99 141
111 55～99 154
127 50～99 177
183 45～99 196
166 40～99 176
113 35～99 125
151 30～99 104
226 25～99 206
175 20～99 142
101 15～99 68
218 10～99 257
248 5～99 199
241 0歳～4歳 216
500 400 300 200 100 (人) 0
0 100 200 300 400 (人) 500


人口ピラミッド男Ｓ60
男　総数　2,472人
人口ピラミッド女Ｓ60
女　総数　2,583人
1 100歳以上 1
1 95～99 4
12 90～94 20
21 85～89 45
38 80～99 89
52 75～99 99
73 70～99 94
83 65～99 135
112 60～99 151
121 55～99 183
185 50～99 191
166 45～99 177
119 40～99 127
152 35～99 111
242 30～99 202
218 25～99 178
120 20～99 101
49 15～99 39
247 10～99 196
242 5～99 230
218 0歳～4歳 210
500 400 300 200 100 (人) 0
0 100 200 300 400 (人) 500


人口ピラミッド男Ｈ２
男　総数　2,506人
人口ピラミッド女Ｈ２
女　総数　2,621人
100歳以上
3 95～99 9
13 90～94 26
28 85～89 63
41 80～99 87
60 75～99 86
69 70～99 123
109 65～99 140
125 60～99 178
176 55～99 192
172 50～99 178
117 45～99 130
158 40～99 110
238 35～99 212
244 30～99 207
152 25～99 138
56 20～99 59
53 15～99 25
244 10～99 230
240 5～99 230
208 0歳～4歳 196
500 400 300 200 100 (人) 0
0 100 200 300 400 (人) 500



男女別年齢階層人口ピラミッド　　出典）国勢調査

表②

学年度	卒業生	進学	パーセント	就職	その他	備考
一九六九	二五八	一六四	64%	九〇	四	
七〇	二四六	一六四	67〃	八二	〇	
七一	二四五	一五六	64〃	六七	二二	中学浪人がその他にいる
七二	二三五	一七七	76〃	五二	六	進学率上昇
七三	二三三	一七九	77〃	五四	〇	
七四	二三八	一八四	77〃	四六	八	
七五	一八四	一三四	73〃	四三	七	
七六	一七三	一三八	80〃	三五	〇	本土就職二二人

表③

流出のためである。25－29歳くらいになると、島に帰ってくる率が高いことが、この人口ピラミッドからも読みとれる。
（この項は、『A村土地分類調査（細部調査）報告書』1997年3月に拠る。）

3　高校進学率や高校中退率など

中学卒業生の進路状況について、1969年から1976年までのA中学の資料をあげる（『A村史』下、611頁）。（表③）

以降は、78.6％（1977年度）、83.3％（1978年度）、86.3％（1979年度）、93.8％（1980年度）、88.3％（1981年度）、91.4％（1982年度）、93.8％（1983年度）、81.9％（1984年度）、93.3％（1985年度）、90.4％（1986年度）、86.0％（1987年度）、88.4％（1988年度）、94.0％（1989年度）、93.8％（1990年度）、94.9％（1991年度）、93.4％（1992年度）と推移している。（各年度の沖縄県教育委員会『学校基本調査報告書』に拠る。）進学率はかつては県平均よりやや低かったが、最近は県平均に比べてやや高い。

このうち、3分の1から4分の1が北部地域に進学する。1992年度入学生の高校中退率は10％（3年間で）であり、1993年度入学生は100名入学して、1年間でこのうち8名が中退している。中退者の内訳を見ると、北部地域進学者には少なく、那覇地区への進学者とりわけ3校に集中する傾向が見られるという。（以上、1995年8月29日、A中学教頭談に拠る。）

4　青年会

青年会の歴史や現況については、Ⅳ（長谷川担当）を参照されたい。